

線状降水帯予測の的中率

防災システム研究所 所長 山村 武彦

◆低い予測精度

今夏、線状降水帯という怪物が傍若無人に暴れまわり、各地に深い爪痕を残した。6月は線状降水帯予測情報(以下「予測情報」)が6回発表されたが、線状降水帯の発生は1回だけだった。7月、予測情報は14回発表されるも線状降水帯は1回も発生していない。

8月分の集計はまだ発表されていないが、8月は予測情報が18回発表され、うち9回線状降水帯が発生したとみられる。特に、九州では大雨特別警報級の線状降水帯が頻発し、鹿児島県霧島市で24時間に512mmと8月平均1カ月分の2倍の雨が1日で降り、熊本県玉名市でも12時間に404.5mmという記録的大雨となり、各地で河川氾濫、土砂災害、家屋浸水などの被害が続出。これまでに4人が死亡し4人が行方不明になっている(8月15日現在)。

昨年、予測情報は81回発表され、うち線状降水帯発生は8回で、的中率は約10%だった。今年はまだ大雨シーズンが続いており確定ではないが、これまでに予測情報は38回発表され、うち発生が10回で現時点の的中率は約26%と推定される。

◆怖いのは「見逃し」

予測情報が出されても線状降水帯が発生しなければ、結果として良かったのだが、「空振り」が続くと信頼度が低下し防災対応にも影響する。さらに、空振りより怖いのが「見逃し」である。

昨年9月21日、石川県能登地方に記録的な大雨が降り、河川の氾濫や土砂災害で16人が犠牲になった。気象庁は同地方で線状降水帯発生を確認したが、予測情報は発表されていなかった。

元日の大地震で多数の斜面が崩壊し土砂堆積箇所は2000箇所以上に及び、少しの雨でも重大な災害が起きやすい状況だった。それでも予測情報が半日前に発表されれば、厳重警戒・早期避難が呼び掛けられ、家ごと流された女子中学生をはじめ、多くの犠牲者を出さずに済んだかもしれない。

昨年全国で発生が確認された線状降水帯は21回、うち能登半島豪雨を含め見逃しは13回あり見逃し率は約62%。予測情報の精度向上が喫緊課題となっている。

◆外れても大雨は降る

昨年5月から予測情報は府県単位の発表になったが、さらに市町村単位を目指し、気象庁はスーパーコンピューター「富岳」の活用、極軌道衛星による水蒸気データの高度利用化などを進めており、その成果に期待したい。

線状降水帯の出現が予測できた時、約半日前に警戒を呼び掛ける予測情報。対象地域には、その時すでに大雨警報や土砂災害警戒情報が発表されていることが多く、災害級の大雨が降ることには変わりはない。過去にも、予測情報が空振りでもその府県や周辺で河川氾濫、道路冠水、土砂災害、突風・竜巻など、何らかの災害が発生している。

予測情報が出たら、府県やその周辺自治体は危険区域へ早めの避難情報発令、避難所開設を進め、企業は業務縮減や計画運休、住民は防災再点検、危険区域は念のための立退き避難を急ぐべきだ。的中率に惑わされ災害予防行動を躊躇してならない。また、予測の見逃しも見越し、大雨警報や土砂災害警戒情報発表時点で線状降水帯発生を想定した対応を取る必要がある。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111 (代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003